第 3 章

中学部の研究

中学部

Ⅰ　研究概要

1　中学部の現状と課題

1-1 「合わせた指導」の授業づくり

1-2　1、2年次の研究の成果と課題

2　今年度の取組

Ⅱ　実践報告

実践報告４　　１年生「 パンやさんをひらこう～レッツ♡ゴー　ベーカリー～ 」

実践報告５　　２年生「 和カフェをひらこう～パート2～ 」

実践報告６　　３年生「 校内実習をがんばろう 」

Ⅲ　研究のまとめ

1 「『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」の成果

1-1　主・対・深の視点の整理による意識向上

1-2 合わせた指導の強みとの関連

2 「単元計画評価シート」活用の成果

2-1 「単元計画評価シート」をデータ上で作成・記録するメリット・デメリット

2-2 評価場面での活用

3　今後の実践に向けての課題

3-1 目指す姿、「確かな学び」に関する課題

3-2 深い学びに関する課題

3-3 授業づくりの要点の見直し

※実践報告ページの QR コードから「単元計画評価シート」をご覧いただけます。

※公開する「単元計画評価シート」は、個人情報への配慮から、「単元計画シート」、「単元評価シート」、「授業計画評価シート」、「『確かな学び』見取りシート」の一部となります。 また、公開終了は、令和7年度8月頃を予定しています。

Ⅰ　研究概要

1 中学部の現状と課題

1-1「合わせた指導」の授業づくり

中学部では、「合わせた指導」として、日常生活の指導、各学級や学部で行う生活単元学習、縦割りのグループ編成で行う作業学習を設定している。なかでも、生活単元学習と作業学習を教育課程の中心に据えている。

(1) 生活単元学習における学習活動とねらい

学級ごとに行う生活単元学習では、生徒の興味関心が高く、学校や社会生活と自分とのつながりを感じることができる題材を用いて、テーマ性や単元と単元をつなぐ文脈・ストーリー等を設定し、年間を通して総合学習としての拡がりと繋がりのある単元計画を立てて行っている。また、行事や学校生活に関すること、社会生活に関すること、家庭生活に関すること、余暇生活に関すること、自然・文化に関すること等を単元設定して取り組んできた。それらの学習活動を通して、活動に対する意欲や行動を喚起し、必然性のある活動を通して各教科等の見方・考え方を働かせながら、生活の技能・技術の獲得、生活上の課題の解決や解決を図る態度の育成を目指している。また、集団の中で、自己と他者への認知を深め、社会とのつながりを感じる経験を積み、互いを認め合う経験やルールを守ること、思いやりの大切さや社会の一員であること、自己を大切にすることなどの理解を深めることもねらいとしてきた。さらに、キャリア教育の観点から、総合的な学習の時間と関連づけながら、「社会的自立、職業的自立（勤労観、職業観）の育成」に積極的にアプローチする学習として以下のような学習機会を設定している。

○ １年　職業模擬学習Ⅰ
・物を介在させた奉仕的な活動をして、他者(校内を中心)に感謝･称賛されることを体感できる体験活動

○ ２年　職業模擬学習Ⅱ、職業体験学習
・物を介在させた奉仕的な活動をして、他者(地域・校外を中心)に感謝･称賛されることを体感できる体験活動
・実際の事業所での職場体験活動をし、仕事の仕組みや業種、働くことの喜びとは何かを知る活動

○ ３年　実習体験学習（校内実習）、職場体験学習
・校内で２週間程度、全時限働く活動を体験したり実際の事業所での職場体験活動をしたりして、仕事の仕組みや業種、働くことを経験する活動

このキャリア教育の取組は、「はたらく学習」という単元の一つとしたり、あるいは各学級の年間のテーマ等と関連づけながら行っている。体験等を行う職種の選定に際しては、３年間で産業分類、第一次（農業等）、第二次（加工、製造等）、第三次（サービス業･商業等）をバランスよく経験することとしている。

(2) 作業学習における学習活動とねらい

作業学習では、農園芸班と紙すき班の２つの作業班を設定し、作業活動を学習の中心として、様々な教科等の内容を総合的に学習し、生徒の働く態度や意欲を培い、将来の社会生活の自立を目指した取組を行っている。紙すき班は、牛乳パックを細かくちぎったり、ビニールをはがしたり等、主に手指の巧緻性・操作性を、農園芸班では、足腰に力を入れてスコップや耕耘機等の道具を扱う、様々な体の動きを体験することをねらいとした作業内容を設定してきた。また、作業学習で製作した製品や栽培した農作物は、製品頒布会等で実際に頒布することでやりがいをもてるようにし、一定の仕事に継続的に取り組み、働く態度を身に付けられるようにすることをねらいとしてきた。

1-2 1･2年次の研究の成果と課題

１年次は、これまで行ってきた「合わせた指導」の授業における学習内容の分析・整理を行い、評価規準を設定する要素やその枠組みを「授業づくりのフレームワーク」という形でまとめた。２年次は、単元計画の作成において、「単元の評価シート」を表計算ソフトを用いて電子データで作成し、学習指導要領の各教科等の内容を「単元の評価シート」に反映しやすくした。

これらの取組により、学習指導要領に示された目標・内容の参照や必要な情報の入力がしやすくなったり、単元の指導計画と「単元の評価シート」、全体の計画と個々の計画におけるデータの連携がとりやすくなったりしたことで、学習内容の整理や評価規準の設定を効率よく行うことができた。

一方で、１・２年次の課題として、単元計画の作成においては、取り扱う各教科等の目標・内容を適正な数に設定すること、単元内における３観点の評価規準をより効果的かつ適切に配置することが挙げられた。また、学習評価に関して、同じ段階の生徒であっても個々の実態によって、目標や手立て、評価の判断基準、支援の方法・程度は様々であることから、評価の記述の仕方を工夫し、どのように授業づくりに効果的につなげられるかを検証することの必要性が挙げられた。

2 今年度の取組

１・２年次の研究における課題から、「単元を通して目指す姿」や「『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」、そのための具体的な支援・手立てを項目立てするために、「授業を行う上で大切にしていること」をテーマに話し合いを行った。その結果、「活動への目標を自分で設定する」「見通しをもたせるようにする」「自分で考える場面を設定する」「教員からの指示が多くなりすぎないようにする」「自分で判断する機会を設定する」「役割の明確化をする」「始まりと終わりが分かりやすい場を設定する」等の意見があげられ、これらの支援や授業づくりの視点は大切であるということを共通認識した。

しかし、これらの授業における支援・手立て、教材・教具・指導の工夫の「目的」は何なのかということを明確にする必要性が話題に上がった。その中で、学習者である中学部の生徒にどのような学ぶ姿を目指して欲しいのかを明らかにすることで、最終的な支援や授業づくりも明確になると考えられた。そして、生徒にどのような姿を目指して欲しいのか、その観点として、各教科等の資質能力の３つの柱「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を身に付けるため、「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業づくりを考えることで、「単元を通して目指す姿」の達成、「確かな学び」の育成につながるのではないかと考えられた。

そこで、生徒が学ぶ姿を「主体的な学びの姿」「対話的な学びの姿」「深い学びの姿」という３つのカテゴリに分け、その姿を引き出すための授業づくりの要点を表としてまとめた。そして、本研究における実践を通して、改善・見直しを行ったものを「中学部の授業づくりの要点」として表１に示した。「中学部の授業づくりの要点」には、学習者である生徒の姿とそれを目指すための指導者側の視点としての授業づくりの要点、その具体的な支援や手立てを考える際に授業者が記入する欄を設けた。さらに、実際の授業の中で行う支援・手立てが何をねらいとしたもの、根拠は何かを明確にするため、「単元計画評価シート」内の「授業計画評価シート」において、授業の「展開」の中の具体的な支援・手立てを「中学部の授業づくりの要点」のどの項目に当てはまるか検討し、それぞれの支援・手立てについて項目番号を記入することとした。

以降の実践報告で具体的な実践、指導・支援の事例を報告する。また、「中学部の授業づくりの要点」の改善・見直しの経緯の詳細などは、P47 を参照されたい。

表１　中学部の授業づくりの要点

	目指す学びの姿 （生徒の姿）	授業づくりのポイント （指導する側の視点）	具体的な支援・手立て （指導する側の視点）
主体的な学び	**主①興味関心・やる気をもつ**	主①-1 自分との関連性を高める題材/教材の設定 主①-2 自己効力感を得られる活動の設定 主①-3 自己選択、自己決定する場面の設定 主①-4 不安要素や気を散らすものの除去・軽減 主①-5 学びの振り返りを次の学習活動へつなげる	
	主②自らはじめ、努力を続ける	主②-1 学習活動の目標や目的の理解を促す 主②-2 一人で進められる環境づくり 主②-3 活動に見通しをもたせる 主②-4 達成感を得られる課題の量/時間等の調整 主②-5 個々の実態に応じた力を発揮できる適切な役割分担 主②-6 取り組みに対するフィードバック	
	主③目標をもつ	主③-1 キャリア形成との関連づけ 主③-2 目標や目的の理解を促す 主③-3 自分で目標を設定/選択する機会の設定	
対話的な学び	**対④他者・教材・資料・ものから情報を得て学ぶ**	対④-1 情報理解のための多様な手段と場の提供 対④-2 他者・ものから情報を得る、学ぶ場面の設定 対④-3 協働する活動、他者とかかわり合いながら学ぶ機会の設定 対④-4 他者との振り返りを行う場面の設定	
	対⑤考えを表現し、他者に伝える	対⑤-1 コミュニケーションスキルの向上を図る 対⑤-2 多様な表出の手段と場の提供 対⑤-3 個に応じた考えの整理、まとめ方への支援	
	対⑥他者と学ぶ楽しさ、大切さを感じている	対⑥-1 共通の目的・目標を強調し、協働の重要性を知らせる 対⑥-2 対話から学ぶことの重要性への意識づけ 対⑥-3 互いに認め合い、称賛し合う場面の設定 対⑥-4 集団の中で活躍して認め合える役割分担	
深い学び	**深⑦学んだ知識・技能を結びつけ、活用する**	深⑦-1 既習事項と関連性のある課題の設定 深⑦-2 既習の知識と新たな学びの関連づけ 深⑦-3 学びを振り返り、生活への生かし方を考える問いかけ	
	深⑧他の場面で活用・応用する	深⑧-1 日常との結びつき、般化を意識した活動設定 深⑧-2 定着・習慣化を目指した繰り返し行う活動の設定 深⑧-3 他の場面での応用を想定した支援方法の検討	
	深⑨自分の行動を評価する	深⑨-1 自己の進捗状況、学びの過程、学習状況の確認を促す 深⑨-2 自己評価を行う場面の設定	
評価	○教員の見取り、評価の共通理解		

実践報告４

生活単元学習「パンやさんをひらこう～レッツ♡ゴー ベーカリー～」

長谷川秀丸・丸山碧

■中学部　第１学年

１ 単元について

(1)単元観

本学級は、１学期に自分たちで作った食パンでピザトーストの調理を行い、校内の職員に振る舞うことで、多くの人に褒められる・喜ばれる経験をした。そこから、生徒らはパン作りへの興味が高まり、２学期には作ってみたいパンを考えたり、おいしく作る方法を調べたりしてパンの調理に取り組んできた。それらの経験を通して、生徒らは多くの方にパンを食べてもらいたいと考えるようになり、１０月にパン屋を開店することにした。開店に当たり、事前に街のパン屋に行き、店頭で使用されている道具や店員の服装、接客などの見学を行った。見学後にクラス会議を行い、お店に必要な物や接客の仕方・言葉など考えて、看板やパンを置くトレーの製作、接客練習に取り組んだ。実際にお店を開いた際には「自ら活動に取り組む」姿が見られるようになってきた。生徒たちは、お客様からのアンケートを通して自分たちのパンを評価されたり、お礼を言われたりする経験を積み、更に多くの方にパンを振る舞い喜んでほしいという意見が出るようになった。

そして、１２月に本単元である校内外のお客様を対象とするパン屋の開店という学習活動を設定した。本単元では、今までの生徒の実態を踏まえ、集団の中で自分の役割に取り組むこと（社会、職業・家庭）や、集団の中で自らの役割に取り組んだり、場面に応じてお客さまへ適切な言葉遣いで接客したりする（国語）などの活動を設定した。

本単元では、生徒一人一人が自分の役割を理解し、継続して活動に取り組める力を発揮し、接客や仲間とのかかわりの中で望ましい言動を身につけることをねらいとした。そして、仲間と共にやり遂げる達成感や称賛・感謝される経験を積み、目標に向かって取り組む力を育み、他者に喜ばれることに喜びを感じられるよう学習活動を展開した。

(2)中心となる各教科等の目標･内容

各教科等	段階	内容のまとまり	
社会	中１段階	ア 社会参加ときまり	（ア）社会参加するために必要な集団生活に関わる学習活動
国語	中１段階	ア 言葉の特徴や使い方	（カ）普通の言葉との違いに気を付けて，丁寧な言葉を使っている。
職業・家庭（職業分野）	中１段階	A　職業生活	ア 働くことの意義
職業・家庭（家庭分野）	中１段階	B　衣食住の生活	イ 調理の基礎

(3)単元の指導計画

次	時数	学習活動	教科等	知	思	主
1	2	「開店準備」 〇チラシ作成 〇お店の計画や自分の役割の確認	社会	〇		
			職業	〇		

2	12	「レッツ♡ゴー ベーカリーをひらこう」 〇調理 〇開店準備（看板やトレー、イートインスペースの清掃・準備、パンの調理） 〇接客練習 〇お店の運営	社会		〇	〇
			国語	〇		〇
			職業	〇	〇	
			家庭		〇	〇
3	2	「振り返り」 〇今までの活動の振り返り 〇お客様の感想の確認 〇がんばったことや楽しかったことの発表	社会		〇	〇
			職業			〇

2 学習評価と「単元を通して目指す姿」について

(1)対象生徒Ｄについて

【単元についての実態】

自分が取り組む活動以外のことが気になったり、他者の気を引いたりする言動により、活動に継続して取り組み続けることが難しい場合があるが、手順表や工程表などを活用することで見通しをもち、回数や時間などを設定することで取り組み続けることができる。手指の巧緻性においては、パンの具を包んで丸めたり、生地を捏ねたりすることができる。コミュニケーションの面では、一文字ずつ発音をするなど、スムーズに発音することに課題はあるが、聞き取りやすい声量でゆっくりと話すことができる。新しい言葉は、繰り返し発音することで習得することができる。場面に応じた言葉の選択では、カード等で言葉を提示して、繰り返し行うことで定着を図ることができる。

【単元を通して目指す姿】

① 自分の役割に継続して取り組める姿

② 場面に応じた言葉を選択して、他者と接する姿

(2)「『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」について

生徒Ｄの実態から、本単元の目標の達成や学習活動の取り組みを促す支援として、

① 継続して取り組むために、活動量や調理するパンの個数の設定（主②-2、主②-4）

② 接客時に場面に応じた言葉が選択できるよう、言葉のカードの使用（対⑤-1）

を設定した。

①については、本人の過去のパンの仕込みの様子から継続して取り組める時間と量を調整した。また、目標の個数を全部作り終えるまで継続することは難しいため、複数の生地をやり終えた時に称賛したり、残りの具材の数を伝えたりすることで気持ちが活動に向くようにした。生徒Ｄは、数が減っていく方が分かりやすいため、「お皿に置いたベーコンがなくなったら調理終了」と伝えた。

②については、文字を読むことができるため、「いらっしゃいませ」、「どうぞ」、「ありがとうございました」のセリフカードを読み、接客をする練習を設定した。また、言葉と場面を対応させ、本人がどの場面でどのように話せばよいかをわかりやすくするためのカードも使用した。このカードは、生徒Ｄ自身が場面に合う言葉を意識して接客できるよう、お客様が来た時は表面に書かれた「いらっしゃいませ」を言う。お客様にパンを渡すときにはカードを裏返して、裏面に書かれている「どうぞ、ありがとうございました」を言う。一連の動きと言葉を一致させることで、接客時の言葉の定着を図った。

(3)学習評価

表１　対象生徒Ｄの【職業・家庭】の学習評価

【職業分野】(中学部１段階)				
内容のまとまり		評価規準		単元の評価
ア　働くことの意義	(ア)	知	働くことの目的などを知っている。	準備や調理、片付けなど活動全体に取り組むことができた。開店時に、提示された活動目標の「ていねい」を自分で選んで活動に取り組むことができた。
	(ア)	思	意欲や見通しをもって取り組み、自分の役割について気付いている。	自分の役割を理解し、継続して取り組むことができた。担当の確認時に、自分の作るパンや一緒に行う友達の名前を言うことができ、活動内容に見通しをもって取り組めた。
		主	自分の仕事に取り組むことに達成感を得ている。	目標の個数のパンを作り終えると、「できた～！拍手！」と言っていた。自分自身を称賛する場面があり、達成感を感じていた。

表２　対象生徒Ｄの【国語】の学習評価

【国語】(中学部１段階)				
内容のまとまり		評価規準		単元の評価
ア　言葉の特徴や使い方	(カ)	知	普通の言葉との違いに気を付けて、丁寧な言葉を使っている。	言葉のカードを使用することで、場面と言葉を一致させながら丁寧な言葉で接客することができた。
		主	丁寧な言葉遣いの必要性に気が付き、必要な場面で使おうとしている。	教員の言葉がけを受けながら、場面に合った言葉をゆっくり、丁寧にお客様に伝えることができた。

(4)「単元を通して目指す姿」の評価

① 自分の役割に継続して取り組める姿

パン生地作りの工程において、活動当初は他のことが気になり、大きな声を出したり、人の気を引こうとしたりする姿が見られた。しかし、教員の言葉かけや手本の提示を受け、継続して活動する時間を増やすことができた。また、その際に、材料を混ぜる時間の設定や生地を 5 回叩いて 4 回折るなど具体的な時間や回数を提示することで、継続して生地作りに取り組むことができた。

ベーコンチーズパン作りにおいては、「ベーコンを置く→チーズを置く→丸める→教員に渡す」という流れを設定した。個数は過去の取り組みから、生徒Ｄが継続してできる量を設定した。目標に対応したベーコンをお皿に置き、それがなくなることで終了を理解し、集中して丁寧に取り組むことができた。目標の個数のパンができた時に、「できた～！拍手～！」と自分の取り組んだことへの達成感を感じられた言葉を言う様子が見られた。生地作り、パンの具を包むなどの各工程の自分の役割を理解して、継続して取り組むことは達成することができた。

② 場面に応じた言葉を選択して、他者と接する姿

当初は、ただカードの言葉を読むだけで場面と合っていないことがあったため、場面を減らして、「お客様が来た時」、「パンを渡す時」に限定した。また、お客様が来た時はカードの表面の言葉を言う、渡す時にカードめくって裏面の言葉を言う使い方を理解した。最初は教員の言葉かけを要したが、回数を重ねる中で自発的に場面に合った言葉を言うことができた。

３「確かな学び」について

■「確かな学び」の見取方法

① 自分の役割に継続して取り組める姿

作業学習、制作活動、家事活動、掃除など行動観察、成果物の数などで見取った。その継続時間や量の伸びを評価の基準とした。

② 場面に応じた言葉を選択して、他者と接する姿

作業学習、日常生活における様々な報告・連絡場面、コミュニケーション場面全般で見取った。その際、言葉を選択する場面を設定し、行動観察をした。また、学校外の場面で報告・連絡する場面も想定し、家庭からの聞き取りも見取る方法とした。

■「確かな学び」の評価

①に関して、作業学習では自分の役割を継続するため、活動の手順、回数、時間などを設定し取り組んでいる。できたときに称賛することで、より意欲を高めて継続して取り組むことができている。実態に合った活動内容の設定も継続する上で重要である。また、床の雑巾がけにおいて最初に回数を提示して、その回数分の洗濯ばさみと洗濯ばさみを挟んだ箱を用意する。１往復するごとに洗濯ばさみを取って箱の中に入れることで、残りの回数が分かり、継続して雑巾がけに取り組むことができた。

②に関しては、日常の様々な場面で報告・連絡の場面を設定している。朝登校して、連絡帳とファイルを出す時に「〇〇先生お願いします」、自分の連絡帳を書き終え教員に確認してもらう時に「〇〇先生、できました」と伝えることができた。家庭からも、単語だけの要求ではなく「お願いします」を言う場面があったと報告を受けている。

４ 本研究の成果と今後の課題

〇成果

・「単元計画評価シート」は各教科等のバランスを考えながら授業を行うことにおいて効果的であった。各教科等の知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度を評価することで、本単元だけではなく次の単元でどのように導入するか、どのような発展した授業を行うかなど、年間の単元の教科等の繋がりが整理でき、効果的な学習活動になるのではないかと考える。

・「単元で目指す姿」→「単元以外で見られる姿」を検討することは、生徒の生活スキルや生活の幅の拡大に繋がるのではないだろうか。そのような視点をもつことで、系統的な授業の展開、発展が行えると考える。また、「単元評価シート」に記載することで、授業者間の共通理解を深めると同時に生徒の将来像を考える機会になった。

〇今後の課題

・単元で目指す姿、各教科等の知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度と評価する項目が多くある。勿論、評価は大切であるが「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」から生徒の学び方も評価するのであれば、シートの整理が必要である。

・「『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」を「主体的な学び、対話的な学び、深い学び」から指導・支援を整理し指導案の展開部分に明記した。教員が意識して、主・対・深の視点から授業づくりができたが、再度内容を検討、整理することでより効果的なものになると考える。

実践報告５

生活単元学習「 和カフェをひらこう～パート2～ 」

福士夏実・谷内田怜

■中学部　第２学年

１ 単元について

(1)単元観

今年度は、「和カフェ」を題材に生活単元学習の学習を展開し、お茶を淹れたり、和菓子を作ったりする活動では、作ることの大変さや食べた時の喜びを感じる姿が見られた。本単元では、和カフェの改善点などを考える話合いを「カフェ会議」と呼び、１回目に開店した和カフェを振り返る学習から始めた。「カフェ会議」では提供した和菓子の改善や接客の仕方の見直しを行い、お客様に喜んでもらえるような和菓子を作ったり、接客を考えたりした。また、お客様からの意見を参考に、メニューを増やしたり、餡を変更したりすることも発案された。お客様からの染物の衣装が素敵だったという意見を受け、染物で和小物を作製し、お客様へプレゼントすることにした。開店準備では接客練習を中心に行うとともに、餡を作るなどの調理準備を行った。２回目のお店は３日間開店し、接客、調理など生徒の実態やねらいに応じた役割を用意することで、自分の役割に取り組むこと（社会、職業・家庭）や、集団の中で自らの意見を述べ、お客さまへ丁寧な言葉遣いで接すること（国語）などの活動を自然な文脈の中で設定した。「お店の運営」という形態をとることで、接客等を通して相手のことを考えた言動や適切な言葉遣いを学習する機会を作り、一人一人が自主的に役割に取り組み仲間とともにやり遂げる達成感や、他者から称賛、感謝される経験を積み、将来の働く意欲にもつなげていくことができると考えた。

(2)中心となる各教科等の目標･内容

各教科等	段階	内容のまとまり	
国語	中学部２段階	A　聞くこと・話すこと	エ　相手に伝わるように発音や声の大きさ，速さに気を付けて話したり，必要な話し方を工夫したりしている。
社会	中学部２段階	ア　社会参加ときまり	（ア）社会参加するために必要な集団生活に関わる学習活動
職業・家庭（職業分野）	中学部２段階	A　職業生活	ア　働くことの意義
職業・家庭（家庭分野）	中学部２段階	B　衣食住の生活	ウ　調理の基礎

(3)単元の指導計画

次	時数	学習活動	教科等	知	思	主
1	5	「カフェ会議」 ・カフェ開店後の振り返り ・おみやげ作り　・かざりづくり	社会	○		
			職業		○	○
2	5	「和菓子をつくろう」 ・お団子　・どらやき　・おしるこ ・あんこ　・しろあん　・まっちゃあん	国語		○	
			家庭	○		○
3	10	「和カフェをひらこう」 ・開店準備　・お店オープン ・振り返り	国語		○	○
			社会		○	○
			職業	○	○	○
			家庭		○	○

２ 学習評価と「単元を通して目指す姿」について

(1)対象生徒Ｉについて

【単元についての実態】

人と関わることを好み、接客の仕事に楽しみながら取り組めるが、一方的に話しかけ続けてしまったり、場にそぐわない発言をしてしまったりと、その場に適した言葉を自分で考えて使うことは難しい。見通しのもてる活動に対しては自ら活動に取り組み始めることができるが、十分な説明や手本の指示があっても、初めてのことや自信がもてないことは、他の生徒の様子を見てから動いたり、教員からの言葉かけを受けてから取り組み始めたりすることが多い。また、気持ちが乗らないと活動に取り組めなかったり、他のことに気をとられてしまったりすることがある。

【単元を通して目指す姿】

①自分の役割（接客）を理解し、気持ちを逸らさずに取り組む姿

②適切な言葉や態度で接客する姿

(2)授業づくりの要点について

生徒Ｉの実態より、活動の見通しがもてなかったり、どのように行えばよいか分からなかったりすると、活動に気持ちが向かなくなり、上記①や②の姿が見られなくなると考えた。そこで、繰り返し取り組む活動の設定と適切なタイミングでの称賛を行うことで、自信やモチベーションが向上し、見通しをもって主体的に活動に取り組めるようになると推測して、手立てを考え実践した。活動に取り組む際、生徒Ｉには個別に活動内容等について説明を行い、実物や写真を見せながら、より分かりやすく伝えられるようにした（主②-3、対④-1）。また、活動のイメージをもてるよう、ロールプレイなどの手立ても取り入れた（主②-3、対⑤-2）。さらに、場面に応じた言葉を自分で考えて話すことが難しいため、事前に教員と場面に合わせた言葉遣いを確認する場を設定した（対⑤-3）。そして、１人でお客様を席まで誘導できるように、セリフカードを用意し、自分で確認しながら進められるようにした（主②-2）。単元の中でお店を３日間開店し、自分の役割に繰り返し取り組むことで、役割への理解を深めたり、自信をもって取り組めたりすることをねらいとした（深⑧-2）。

(3)学習評価

表１　対象生徒Ｉの【国語】の学習評価

【国語】(中学部1段階)				
内容のまとまり	評価規準			単元の評価
A　聞くこと・話すこと	エ	思	相手や目的に応じた話し方で話している。	接客場面でお客様を適切な言葉遣いで席まで誘導することができた。
		主	相手や目的に応じた話し方の必要性に気が付き，使おうとしている。	接客場面で、お客様に対して丁寧な言葉遣いで接客すると喜んでもらえることに気付き、セリフカードを活用しながら丁寧な言葉遣いで接客しようとする姿がみられた。

表２　対象生徒Ｉの【職業・家庭（職業分野）】の学習評価

【職業分野】(中学部1段階)				
内容のまとまり	評価規準			単元の評価
ア　働くことの意義	（ア）	知	働くことの目的などを知っている。	丁寧な言葉遣いや接客をすることでお客様に喜んでもらえることを体感し、お店準備や運営を行うことができていた。
	（イ）	思	意欲や見通しをもって取り組み，自分の役割について気付いている。	1 回目のお店の経験を生かして、自分の役割を理解して取り組むことができた。
	（ウ）	主	作業や実習等で達成感を得ている。	お団子作りやおしるこ作りを頑張ったと自分で振り返っている姿が見られた。また、接客場面でも１回目のお店での反省点を意識して取り組めたと話しており、達成感を得ている様子がみられた。

(4)「単元を通して目指す姿」の評価

①自分の役割（接客）を理解し、気持ちを逸らさずに取り組むことができる姿

回数を重ねるごとに自分の役割への理解を深め、活動に取り組むことができた。お客様を席に誘導するのは自分の仕事であるという自覚をもっている姿が見られ、入り口で待機し、お客様が来たら大きな声で「いらっしゃいませ」と言うことができていた。お客様の中に知っている人がいると、その人に注意が向いてしまうこともあったが、自分の役割に最後まで取り組むことができた。

②適切な言葉や態度で接客することができる姿

接客の場面ではセリフカードを使用して、何度もロールプレイを通して練習を重ねたことで、その場で言うべき言葉を正確に選んで伝えることができた。慣れてくると手に持っているカードを見ずにセリフを言うことができていた。一方で、セリフカードに書かれている言葉は、タイミングよく使うことができていたが、接客場面で臨機応変に対応しなければならない時に、その場に合ったやり取りをするのは難しかった。

３「確かな学び」について

■「確かな学び」の見取方法

生徒Ｉの「確かな学び」の姿として、本単元を通して身についた目指す姿が他の場面でも見られるように活動や場面を設定した。具体的には、

① 生活単元学習や作業学習等の授業、家庭での家事の中で、自分の役割を理解して、設定された時間いっぱいやり続ける。また、周りの状況に左右されずに集中して活動に取り組むことができる。

② 日常生活や授業の中で、事前に話すことやセリフ、態度の確認をし、場に応じた言動をとることができる。

■「確かな学び」の評価

①作業学習では、授業の始めにボードを見て、その日の自分の役割や目標を確認し、理解して取り組むことがで

きるようになった。作業は手を止めずに時間いっぱい取り組むことができるようになった。掃除の場面では台拭きをすることを理解して取り組めているが、指示された場所ではないところを拭いてしまうことがあった。だが、指摘を受け入れて取り組むことができるようになってきた。家庭では絵カードや表をホワイトボードに貼って、帰宅してから行うことや朝食作りの家事の確認をして取り組んでいる。本人もやることや順番が分かり、見通しをもって取り組めているため、1 人でも家事を行えることが増えてきた。家庭ではスムージー作りを行っており、集中して取り組めることも増えてきた。

②事前に話すことやセリフを確認していれば、その場に合った言葉遣いで話すことができるようになった。聞き慣れない言葉や難しい言葉は、何度か練習する必要があるが、それ以外は概ね適切に話すことができるようになった。また、授業の終わりに行う振り返り場面では、話す内容がまとまらないこともあったが、徐々に自分の活動を適切に振り返り、自分の考えをまとめながら話すことができる姿が見られるようになってきた。職員室のゴミ捨ての家事活動の際には場に合わせた言葉遣いを意識して取り組むことができている。

4 本研究の成果と今後の課題

〇成果

本研究を通して、生徒の「確かな学び」を改めて意識するようになった。学んだことを生活の中で生かしていくことが、大切な学びであると再認識することができた。そして、自分の授業づくりを振り返るよい機会にもなった。「『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」から考えた具体的な支援・手立てを取り入れたことで、主体的な学び、対話的な学び、深い学びのポイントを意識した授業づくりを行えるようになった。また、自分の授業づくりの中で、主体的な学びの要素が強く、深い学びの要素が少ないなど客観的に授業づくりを振り返ることができた。授業づくりのポイントを参考にすることで、自分の考えを整理して、学習者の目指す姿に対する手立てを考えながら授業づくりを行うことができた。

〇今後の課題

課題については２点考えられる。

１点目は、「『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」を改めて取り入れてみたことでわかった、深い学びの要素を取り入れることの難しさである。今後授業づくりを行う上で主体的な学び、対話的な学び、深い学びの要点を意識して授業づくりを行っていきたい。

２点目は「確かな学び」の見取りについてである。「確かな学び」を見取るには、今回の単元では少し時間が足りなかったように感じる。長期的な視野で生徒の「確かな学び」を見取っていく必要があるため、今後も生徒の変容を見ていきたい。

実践報告６

生活単元学習「校内実習をがんばろう」

鈴木健太・福谷ちづる

■中学部　第３学年

１ 単元について

(1)単元観

本単元では、社会に出て働くことや社会人としての生活を知るために、働いて給料をもらい、その給料を使って好きな物を買うという、「働く生活」の一連の流れを学習した。単元の導入時に、給料をもらったら何を買いたいかを生徒それぞれに確認し、実習後の楽しみをもてるようにした。１０日間の実習期間は空き缶リサイクルの作業を行い、生徒の実態やねらいに合わせて、仕分け・プルタブ外し・シール剥がし・缶洗い・缶つぶしの作業を設定した。実習では「最後まで続ける」「丁寧に取り組む」「報告・相談をする」を目標とし、繰り返し取り組む中で、働くことの意義や仕事における持続性、巧緻性（職業)、相手に伝わる発音や声の大きさに気を付けて、正しい言葉遣いで話す（国語)、それぞれ活動の中で行った個数やつぶした空き缶の数を数えたり比べたりする（数学）ことを扱った。また、本単元を通して、仕事としての技能や働く態度、姿勢を養うとともに、職業観・勤労観を育むことをねらいとした。そして、働くことで給料を得て、その給料を用いて食事や買い物をするなど、余暇を楽しむ経験をすることで、働く意味を知る機会としていきたいと考えた。

(2)中心となる各教科等の目標･内容

各教科等	段階	内容のまとまり	
職業・家庭(職業分野)	中２段階	A　職業生活	ア　働くことの意義
職業・家庭(職業分野)	中２段階	A　職業生活	イ　職業
国語	中２段階	ア　言葉の特徴や使い方	発声や発音に気を付けたり、声の大きさを調節したりして話している。
国語	中２段階	A　聞くこと・話すこと	相手に伝わるように発音や声の大きさ、速さに気を付けて話したり、必要な話し方を工夫したりしている。
数学	中１段階	数と計算	ア　整数の表し方に関わる数学的活動

(3)単元の指導計画

次	時数	学習活動	教科等	知	思	主
1	4	【校内実習の準備、練習をしよう】 ・今までの「はたらく学習」の振り返り ・校内実習の目的を知る（給料で好きな食べ物を買う！） ・仕事内容の練習	職業ア	○		
2	37	【校内実習をがんばろう】（１０日間） ・はじめのミーティング ・仕事（空き缶リサイクル） ・片付け、実習ノート記入 ・終わりのミーティング	職業ア	○	○	○
			職業イ	○		○
			国語ア	○		○
			国語Ａ		○	○
			数学	○		
3	5	【給料で買い物をしよう】 ・アルミ缶の換金（校外学習） ・給料日、活動や目標の振り返り ・給料で買い物（校外学習）	職業ア	○	○	○

２ 学習評価と「単元を通して目指す姿」について

(1)対象生徒Mについて

【単元についての実態】

興味関心が高い活動、自信や見通しがある作業には、意欲的に取り組むことができる。疲れや暑さを感じたり、作業内容に不安があったりする時は、取り組むスピードが遅くなり、周りの様子が気になってしまい仕事に気持ちが向かないときがある。コミュニケーションの面では、言葉の発音に関して~~は~~、障害特性からの不明瞭さはあるが、どの場面でも大きな声で話すことができる良さがある。伝える相手との距離が遠い、早口になるといった課題もあるが、繰り返し同じ言葉を練習し、相手に伝わる発音の仕方を意識できるようになると、はっきりとした発音ができることが多い。

【単元を通して目指す姿】

① 自分の仕事に最後まで続けて取り組む姿

② 発音に気を付けながら、正しい言葉で報告、相談をする姿

(2)「『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」について

生徒Mの実態より、①では、仕事内容に見通しをもてるようにする、安心して取り組めるような支援具を用意する、そして同じ仕事に継続して取り組めるように仕事内容を調整する必要があると考えた。そこで、本人が仕事をする場所に顔写真を貼る、姿勢が安定するよう手をつく机を設置する、自分で缶の厚みを確認できる支援具を用意する等、見通しをもって一人で取り組められるような環境を整えた（主②－２、主②－３）。どの仕事でも１０個の缶が入るかごを使用し、こまめに検品できるようにした（主②－４、対④－５）。仕事内容では、一日の中で取り組んでほしい仕事とMの興味関心が高い仕事をどちらも取り組めるように役割を設定することで、意欲を保ち続けられるようにした（主①－２、主②－５）。また、仕事に目標や達成感をもつことも大事だと考え、毎回の缶つぶしの結果をグラフにまとめ、互いに見合う機会を設定した（主②－６、対⑥－３）。

②では、相手に伝わる発音で報告、相談をするためには、同じ言葉を繰り返し練習する必要があると考え、普段の生活の中で使用する言葉を基に定型文を設定し、ミーティングで確認したり、紙で提示したりすることを行った（対⑤－１、深⑧－１）。仕事の中でも教員に報告する場面を意図的に多く設定した（対④－２、深⑧－２）。加えて、他の生徒から材料をもらう等、他者とも関われる機会も設定した（対④－３）。

(3)学習評価

表１　対象生徒Mの【国語】の学習評価

【国語】(中学部2段階)				
内容のまとまり		評価規準		単元の評価
ア　言葉の特徴や使い方	（イ）	知	発声や発音に気を付けたり、声の大きさを調節したりして話している。	検品や材料の要求などの定型文の手本を示し、やり直しをしながら繰り返し練習することで、聞き取りやすい発音で話すことができた。
		主	報告、連絡場面で、発声や発音、声の大きさを調整して話そうとしている。	相手に伝わるように定型文の中で自分なりに区切りを入れながら、大きい声で話そうとしていた。うまく伝わっていない時は、やり直しもすることができた。

表２　対象生徒Mの【職業】の学習評価

【職業分野】(中学部2段階) A 職業生活

内容のまとまり		評価規準		単元の評価
ア　働くことの意義	(ア)	知	働くことの目的などを理解している。	働いたらもらえる給料で欲しいものを考えて、仕事に取り組むことができた。もらった給料では、気に入ったおもちゃを買ったりイチゴを買って食べたりすることを通して、働くことと給料のつながりを知ることができた。
	(イ)	思	意欲や見通しをもって取り組み、自分と他者との関係や役割について考えている。	自分の役割が分かり、意欲をもって取り組むことができた。缶つぶしでは、検品後に他の生徒に次の材料を伝わるように言葉を伝え、スムーズに仕事を行うことができた。
		主	作業や実習等に達成感を得て、進んで取り組めている。	仕事ぶりを称賛されることで喜びや笑顔が見られ、それを励みにして積極的に取り組む姿が見られた。

(4)「単元を通して目指す姿」の評価

① 自分の仕事に最後まで続けて取り組む姿

はじめに仕事内容について手本を示しながら説明したことにより、見通しをもつことができた様子が見られ、どの仕事に対しても興味関心をもち、意欲的に取り組んでいた。特に缶つぶしは、教員が示したやり方を正確に真似して一回で缶を薄くつぶすことができ、自信をもって取り組めている様子であった。実習後半になると疲れが見え始め、仕事のペースがゆっくりになり、手が止まっている様子も多く見られるようになった。その中でも、自分でタイマーを見て残り時間を確認したり、教員に応援や励ましの言葉をかけてほしいと要求したりしながら、最後までやり遂げようとする姿勢が見られた。

② 発音に気を付けながら、正しい言葉で報告、相談をする姿

はじめは言葉が早口になり聞き取りにくかったため、何回か手本を示し、言い直すように促したところ、自分なりに言いにくいポイントで区切りを入れ、ゆっくり話せるようになってきた。特に「〇〇先生、検品おねがいします。」は、はっきりと伝えることができた。また、報告するときは立ち止まってから話すことが定着し、併せて相手と目が合ってから話し始める等、相手に伝える意識も高まってきた。

3「確かな学び」について

■「確かな学び」の見取方法

生徒Mの「確かな学び」の姿として、本単元を通して目指す姿が他の場面でもみられるようになるということを設定した。具体的には、

① 生活単元学習や作業学習、家事活動等で、自分の仕事や役割に設定された時間まで取り組み続ける。

② 報告・発表場面を中心として、学校生活全般において、相手に伝わるようにゆっくりはっきりと話している。

とした。見取りの方法としては、担任を中心に、学部の教員全体で行動観察を行うことにした。場面は限定せず、学校生活全般の中で気付いたことを記録してもらい、担任が情報収集するという方法をとった。また②について

は、保護者から家庭での様子について聞き取りも行った。

■「確かな学び」の評価

①について、掃除の掃き掃除や雑巾がけの場面等において、取り組むことの流れを事前に伝えたり、時間を区切って行ったりすることで、設定された時間まで取り組むことができる姿が増えてきた。作業学習では、任された役割に意欲的に取り組み、途中で気持ちが途切れることが無く、最後まで取り組み続けることができるようになってきた。

②について、毎日行っている家事活動の報告において、教員に「〇〇先生いってきます」や「〇〇先生できました」を欠かすことなくはっきりと伝えられるようになった。日常生活の他の場面でも同様に伝えることができている。保護者の聞き取りでも、家庭でも学校の様子等をわかりやすく伝えるようになったという話も聞かれた。

単元の学習も含めて、発音に気を付けながら相手に伝えようと意識をして実践しようとする姿がみられるようになってきた。

4 本研究の成果と今後の課題

〇成果

授業づくりの要点を検討したことで、普段行ってきた支援・手立てを主・対・深の視点で整理することができた。それにより、支援・手立ての偏りや別の視点からのアプローチに気付くことができ、より生徒の「『確かな学び』を育む授業づくり」につなげることができたと考えている。また、同じ支援・手立てでも複数の要点を含むことに気付くことができ、教員の意図によって生徒の学ぶ姿が変わることが分かった。そのため、支援・手立てを行った生徒の姿をより具体的にイメージする大切さを知り、学ぶ姿を想定しながら授業を行うことができた。

〇今後の課題

今回、授業づくりの要点を基に主・対・深の視点で整理したことで、深い学びについてはほとんど取り組めておらず、普段行っている支援・指導の多くが主体的な学びであり、目標によって対話的な学びが含まれていたことが分かった。単元を振り返ると深い学びの要点を入れることに難しさを感じるため、具体的な支援・指導について検討しながら意識的に取り組んでいく必要があると考えている。

また、「確かな学び」は単元単位で評価することが難しく、「確かな学び」を評価するためには、年間を通して見取る視点が必要であった。その際の目標設定や評価の仕方について、さらに検討が必要だと考える。

Ⅲ　研究のまとめ

1 「『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」を用いた成果

中学部では、「『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」として、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」という生徒の学び方に着目し、それぞれの姿とその姿を引き出すために授業づくりにおいて重要となる支援・手立ての考え方を「中学部の授業づくりの要点」として、単元計画、授業計画、授業実践に活かせるようまとめた表を作成した（P３７　表１参照）。また、「中学部の授業づくりの要点」には、学習者である生徒の姿とそれを目指すための授業作りの要点、その具体的な支援や手立てを記入する欄を設けた。

そして、実際の授業の中で行ってきた支援・手立てが何をねらいとしているのか、根拠は何かを明確にするため、具体的な支援・手立ての内容が「中学部の授業づくりの要点」のどの項目に当たるのかを検討し、「授業計画シート」内に項目番号を記入した（表２）。

表２　「授業計画シート」（３）への記入の例

①自分の役割に継続して取り組んでいる。
▶継続して取り組めるよう、時間やパンの個数を調整する。 主②-3　活動に見通しをもたせる 主②-4　達成感を得られる課題の量/時間調整

1-1 主･対･深の視点の整理による意識向上

「中学部の授業づくりの要点」を用いた成果について、学部内で検討をしたところ、以下のような意見が得られた。

〇主・対・深それぞれの視点を意識でき、３つの視点の偏りに気付くことができた。
〇普段行ってきた指導・支援を３つの視点で整理をしたことで、何を目的としているか明確にできた。
〇同じように設定した支援・手立てでも複数の要点を含むことに気付き、生徒の学ぶ姿をより具体的にイメージして授業を行う意識が高まった。

昨年度までの研究では、取り扱う各教科等の目標・内容の設定、単元内における３観点の評価規準をより効果的かつ適切に配置することが課題となっていた。上記の意見からは、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の３つの視点で「授業づくりの要点」を整理したことで、これまで行ってきた指導・手立てのねらいが明確になり、生徒が何を学ぶか、何ができると望ましいのかを踏まえて授業づくりを行うことできたことがわかる。このことから、「中学部の授業づくりの要点」の活用は、教員の授業づくりに対する意識向上につながったと考えられる。

1-2 「合わせた指導」の強みとの関連

また、「中学部の授業づくりの要点」の成果について、以下のような意見も得られた。

〇主・対・深の観点が、合わせた指導の強みと合っていて、効果的な指導が行えた。
〇合わせた指導自体が手立てとして工夫されたものであるため、汎化した姿を想定した授業になっている。

これまでの授業等における支援・手立てを整理したことで、本校の特色である、複数の教科等を合わせて行う「合わせた指導」そのものが、学びに向かう力を育んでいることを再確認した。また、支援・手立ての整理の過

程において、学部教員それぞれがもつ要点のイメージや支援・手立てについて共有することで、支援・手立ての根拠やその要点が生徒のどのような学びの姿につながっているかを整理することができたと考えられる。

2「単元計画評価シート」活用の成果

2-1「単元計画評価シート」をデータ上で作成・記録するメリット・デメリット

今年度は単元に関するデータを記録すること、学習指導要領の内容をより簡易に引用・参照できるようにすることを目的に、「単元計画評価シート」を表計算ソフト Excel のファイルで作成・管理できるようにした。このようなデータ上での作成・評価に関しては以下のような意見が挙げられた。

〇一覧性が向上した。
〇１つのファイルの中で作成・記録することで、単元計画から授業の内容へと落とし込んでいく、内容のつながりが見えやすくなった。
〇文章を揃えにくい、文字が見にくいなどの作成上の課題もあった。

今回のシートは印刷を想定しておらず、紙ベースで使用する時には調整が必要であった。しかし、１つのファイルの中に「単元計画シート」「単元評価シート」「授業計画・評価シート」「『確かな学び』見取りシート」があり、１つずつ順を追って入力していくことで、「確かな学び」を想定した授業計画・実践を行うことができたという意見も挙げられた。

2-2 評価場面での活用

「単元計画評価シート」を用いたことについて、以下のような意見が挙げられた。

〇単元を通して目指す姿から逆算して、手立てや活動内容を考えることができた。
〇毎時間の振り返りがしやすく、単元を通した変化の見取りがしやすかった。
〇各教科をどこで意識してねらうのかをその都度確認することができた。
〇記録の視点が共通化されたことで、次時の授業で内容や手立てを考える際に活用できた。

生徒一人一人の形成的評価を記録する「単元評価シート」には、各教科等の内容について該当時数の欄に「◎」「〇」「△」の３段階で評価を選択し（表３）、特記事項がある場合には文章で入力するようにした。毎時間形成的な学習評価を行うことで、教員が自身の指導を振り返るきっかけにもなり、次時の改善につながった。また、「『確かな学び』見取りシート」では、他の場面で期待できる姿を検討したことで、単元以外の場面においても目指す姿を意識してねらうことにつながり、生徒の意識や行動の変化を様々な場面で教員が見取る必要性を改めて確認した。このように「単元計画評価シート」の活用は教員の意識向上へとつながったと考えられる。

表３　「単元評価シート」への記入の例

知	作業の確実性や持続性，巧緻性等を身に付けている。	◎	缶つぶしのやり方を真似て行える。	◎	持続◎	◎	持続◎	〇	
思									
主	空き缶リサイクルの仕事に持続的に取り組もうとしている。	〇		◎		◎		〇	集中△

3 今後の実践に向けての課題

3-1 「単元を通して目指す姿」、「確かな学び」に関する課題

(1)「単元を通して目指す姿」の設定について

実践報告及び学部内での検討から、「単元を通して目指す姿」の設定について、以下の課題が挙げられた。

〇目指す姿の設定が難しく、どの単元でも同じような姿を目指すことになってしまうのではないか。
〇教科等の学びと目指す姿の関連が不明確であった。
〇目指す姿の捉え方や評価のタイミングについて検討が必要と感じた。

学部教員間では、教科等を学んだことで、目指す姿が達成され、その姿が汎化されていくことが「確かな学び」につながるという共通理解がされていた。しかし、教科等の目標を主・対・深の視点で設定・評価することができた一方で、「単元を通して目指す姿」の設定には難しさを感じているという意見も挙がった。「合わせた指導」だからこそ、教科等ごとの目標を統合した単元としてのねらいを明確にする必要があり、そのねらいが「確かな学び」につながることを教員が意識することが望ましいと考えられる。

(2)「確かな学び」について

今回の研究では、「『確かな学び』へ向けて、本単元ではどのような姿を目指すか」という意図で、「単元を通して目指す姿」を設けた。「確かな学び」はその「単元を通して目指す姿」を汎化した姿であり、年間指導目標と統一して捉えることが望ましいのではないかという意見が挙がった。本校の特色である「合わせた指導」を扱うからこそ、汎化した姿が目標となるため、「合わせた指導」として、今回の「確かな学び」に関する研究を活かしていくことができるのではないかと考えられた。

3-2 深い学びに関する課題

要点の整理を踏まえて授業を実践したところ、以下の課題が挙げられた。

〇深い学びの要点をどのように取り入れていくべきか悩んだ。
〇単元単位での評価が難しい。

主・対・深という生徒の学び方の視点から支援・手立てを整理し、授業に取り入れていく中で、「主体的な学び」に関する手立てが多くなってしまうことがどの実践でも見られた。特に「深い学び」では、より高次の学びをねらっているため、単元内で達成ができるかどうかのイメージがもちにくいとの意見も挙げられた。

「深い学び」の視点に関しては、「深い学びの姿」を達成するための支援を取り入れることの難しさや、「果たしてこの手立てで良いのか」という不安や、「授業の中でそこまでたどり着くのだろうか」という疑問などを教員らが感じたという意見があり、ある程度達成を予測可能な活動ばかりを設定する傾向にあった。

しかしながら、必ずしもその授業・単元内のみで達成を図るのではなく、取り組みを継続する中でできるように変化していくものもあると考えられる。また、１つの手立ての中に複数の要点が関連している場合もあることから、「合わせた指導」という指導形態だからこそ、同じ手立ての中に「主体的な学びの〇〇と、深い学びの△△と…」のように、色々な要素を意図して授業づくりを考えることが有効であると考えられる。

3-3 「『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」の見直し

主・対・深の学び方の３つの視点で整理した授業づくりの要点に関しては、指導助言者から「目指す学びの姿（生徒の姿）」と「授業づくりの要点（指導する側の視点）」を分けて表記した方が良いという助言をいただいた。

そのため、今回の単元で該当した具体的な手立てを表記し（表４）、再度見直しを行った。

表４　中学部１年の実践における授業づくりの要点（抜粋）

	目指す学びの姿（生徒の姿）	授業づくりのポイント（指導する側の視点）	具体的な支援・手立て（指導する側の視点）
主体的な学び	主①興味関心・やる気をもつ	主①-1 自分との関連性を高める題材/教材の設定 主①-2 自己効力感を得られる活動の設定 主①-3 自己選択、自己決定する場面の設定 主①-4 不安要素や気を散らすものの除去・軽減 主①-5 学びの振り返りを次の学習活動へつなげる	・気持ちを落ち着けて活動しやすいように、椅子に座って接客できるようにする。主①-4
	主②自らはじめ、努力を続ける	主②-1 学習活動の目標や目的の理解を促す 主②-2 一人で進められる環境づくり 主②-3 活動に見通しをもたせる 主②-4 達成感を得られる課題の量/時間等の調整 主②-5 個々の実態に応じた力を発揮できる適切な役割分担 主②-6 取り組みに対するフィードバック	・進度状況や残りの時間、ペース配分を伝える。主②-2 ・継続して取り組めるよう、時間やパンの個数を調整する。主②-3、主②-4 ・継続して取り組めるよう、時間を設定したり、活動リストを提示したりする。主②-2、主②-4 ・活動の見通しや終わりが分かるよう、タイマーや枚数を設定する。主②-3、主②-4 ・やることリストを提示する。主②-2 ・分担表を提示して、それぞれの活動に取り組めるようにする。主②-2、主②-3 ・時間を見て、活動の量を調整する。主②-4
	主③目標をもつ	主③-1 キャリア形成との関連づけ 主③-2 目標や目的の理解を促す 主③-3 自分で目標を設定/選択する機会の設定	

表５　授業づくりの要点（深い学びの姿）

深い学び	深⑦学んだ知識・技能を結びつけ、活用する	深⑦-1 既習事項と関連性のある課題の設定 深⑦-2 既習の知識と新たな学びの関連づけ 深⑦-3 学びを振り返り、生活への生かし方を考える問いかけ
	深⑧他の場面で活用・応用する	深⑧-1 日常との結びつき、般化を意識した活動設定 深⑧-2 定着・習慣化を目指した繰り返し行う活動の設定 深⑧-3 他の場面での応用を想定した支援方法の検討
	深⑨自分の行動を評価する	深⑨-1 自己の進捗状況、学びの過程、学習状況の確認を促す 深⑨-2 自己評価を行う場面の設定
評価	○教員の見取り、評価の共通理解	

今回の実践では、どの学年も手立て等を設定した上で、その手立てがどの要点に当てはまるかを確認する形で検討を行っていた。１単位時間の具体的な支援･手立てを表記すると、表４のように該当項目に偏りが生じたが、単元全体を通してみた時には、支援方法の数に差はあるものの、目指す学びの姿の項目に対応した支援を取り入れることができていたことが確認できた。

しかし、「深⑧他の場面で応用・活用する」に関しては（表５）、役割分担を考える時に、得意な事や特性を踏まえた役割を設定することが多いなど、日常生活等に生かすことから支援・手立てを取り入れるよりも、日常生活でできていることや得意な事を生かして授業づくりを行うことが多い傾向にあった。そのため、授業づくりの要点にフォーカスして進めることに難しさを感じたとの意見が挙がった。

「深い学び」に関しては、必ずしもその授業内だけでねらいを達成できるとは言えず、取り組み続ける中で生徒の学びが積み重なり、深い学びへとつながっていくことを共通認識した。今回作成した授業づくりの要点は教員の考え方を変えるためのきっかけとして活用できた。

今後は、さらに実践を積み重ねていく中で、具体的な支援・手立てをより拡充しつつ、改良を加えながら授業づくりの要点を活用していきたい。